

# 1950年前後の日本における都市中流女性の衣服製作・着用をめぐる状況

—雑誌「婦人朝日」記事の分析を中心に—

森 理 恵

(京都府立大学人間環境学部)

原稿受付平成19年9月5日；原稿受理平成19年12月1日

## Urban Trends in Middle-Class Women's Dressmaking and Clothing around 1950 Japan

—An Analysis of Articles from “Fujin Asahi” Magazine—

Rie MORI

*Faculty of Human Environment, Kyoto Prefectural University, Kyoto 606-8522*

This paper aims to clarify advances in research concerning Japanese clothing between the Second World War and the post-war period of rapid economic growth. After Japan's defeat, the circumstances of the transitional period, from the time when there was a shortage of clothing until it became possible to freely obtain clothing, are not sufficiently clear. Through an analysis of articles from the monthly women's magazine “Fujin Asahi” around 1950, this paper clarifies how women remade clothes. At first, women were making western-style clothes by altering second-hand clothes and kimonos with skills and techniques that they had acquired from dress-making schools and books. After clothing regulations were abolished in 1950, new fabrics became available and the variety of clothing increased. Meanwhile, women were not merely imitating American and French fashion, as it has been said up until now. In particular, because much value was attached to work both in and outside the home, it has become clear that clothes specifically intended for work were designed, and the merits of Japanese clothing were taken into account.

(Received September 5, 2007; Accepted in revised form December 1, 2007)

**Keywords:** women 女性, after the Second World War 第二次大戦後, clothing 被服, dressmaking 洋裁, Japanese sewing 和裁, making over a garment 更生利用.

### 1. 緒 言

戦時下の日本の衣服の状況については、標準服を取り上げた横田（1999）、国家の衣服政策とそれに対する人々の対応を解明した井上（2001, 2003）、人絹とミシンを取り上げた横川（2003）等によりその実態が明らかにされつつある。また、いわゆる高度経済成長期以降の日本の衣服の変遷については、家計調査とメーカー・洋裁学校の統計から既製服化を明らかにした奥村（1979）、ストリートファッションの変遷をくわしくたどった渡辺（2005）をはじめとして多くの研究があり明らかにされている。

しかしながら、両者をつなぐ時期、すなわち、敗戦直後の厳しい衣料事情を乗り越えて、流行の衣服を自由に身につけるようになるまでの時期については、体験記の類をのぞいては、「アメリカ化」という観点から敗戦直後の衣生活をとらえた柳（1992）、岐阜・沖繩の古着・既製服流通を中心とする朝岡（2003）などの研究があり、先にあげた渡辺（2005）ほかでも概説はされているが、じゅうぶんに研究されているとはいえない。

日々の着る物にも欠く状態と、華やかなファッションが繰り返される状態はどのようにして連続するこ

とが可能になったのだろうか。当時、衣服製作の主な担い手であった女性たちは、どのような行動をとり、どのようにして衣服を作り、着る自由を手にしたのだろうか。

本報告では、朝鮮戦争の軍需物資調達のため日本経済が活性化し、衣料品統制が完全撤廃される1950年を中心とした時期に焦点を絞り、当時の都市中流女性たちがどのようにして、着る物のない状態から「戦後ファッション」を作り出していったのかを明らかにすることを目的とする。

## 2. 方法

1950年前後における女性たちの衣服に関する行動を知るための方法として、雑誌「婦人朝日」の1947年～1952年の記事を分析する。「婦人朝日」を使用する理由は、主要女性誌「主婦之友」「婦人倶楽部」や、特定のデザイナーの主宰する「それいゆ」「美しい暮らしの手帖」(後の「暮らしの手帖」)などが、衣服の作り方を教える実用記事や、先進的な衣生活を紹介する啓発記事のどちらかに偏るのに対し、「婦人朝日」はそのような記事だけでなく、読者の投稿や洋裁学校の取材などのルポルタージュが多く、読者である当時の女性の実生活を伝える側面が強いためである。

「婦人朝日」は女性全般を読者に想定した雑誌であり、とくに「都市中流女性」を対象にしているわけではないが、農山漁村の女性についての記事は非常に少なく、東京や大阪などの大都市や地方都市が中心になっていることと、時事問題の記事やそれに関する投稿が多いため、ある程度の知識層を対象にしていると考えられることから、本報告の対象を「都市中流女性」とした。

なお第4章を中心に、「主婦之友」「婦人民主新聞」など、当時の他の女性誌・新聞も必要に応じて参照した。また、当時を知る女性へのインタビューも必要に応じて参照した。

「婦人朝日」は、戦前の「婦人」(1924-1937)、「婦人朝日」(1937-1942)、「週刊婦人朝日」(1942-1943)を前身として、1946年2月に創刊され、1958年12月に終刊した月刊誌である。女性を対象とし、時事問題から衣食住、文化まで幅広くあつかう総合誌である。発行は朝日新聞東京本社のち朝日新聞社、B5判で、文芸誌の性格を強めた最後の2年間はA6判となった。特集記事のテーマは夫婦・結婚、労働、政治、教育など、グラビアはファッション、労働、美術、有名

女性の生活(皇族や旧華族、有名男性の妻ではなく「女優」「女流作家」「女流画家」など自分の仕事で活躍する女性が多い)、連載は小説、衣食住、医学、映画批評などである。かすかすの投稿募集が特色で、テーマを決めて時事問題への意見を募った「読者批判」にはじまり、「私の作文」「我が家の工夫」、ルポルタージュなど多岐にわたる。編集部では採用如何にかかわらず「投稿者カード」をつくり、ときには「読者記者」を派遣、記事依頼をしている。広告は化粧品が圧倒的に多く、他に、薬品、調味料、電化製品、金融機関などである。衣服に関する広告については後述するが、全体から見ると少ない。

なお本報告では、引用に当たり、旧漢字・旧かなづかいや当用漢字・現代かなづかいに改めて表記した。

## 3. 結果と考察

(1) 「婦人朝日」1947～1952年の衣服関連グラビア・本文記事・広告

### 1) 1947年

前年の創刊年は58～62ページであったが、1947年は、1月号78ページ、2～4月62ページ、5月以降40ページと、徐々にページ数を減らしている。他誌でも同様の現象が見られ、用紙不足によるものらしい。

グラビアは2～3色刷りで、「巴里のモード」(A.F.P.提供)、「流行をつくるムーヴィー・デザイナー」(ニューヨーク・タイムズ特約)といった華やかな海外情報がある一方、「ドレスメーカー女学院生徒製作」の和服・洋服・ひざ掛けから更生した衣服を紹介する「布を扱う工夫」(八巻千秋)、手持ちの洋服や小物にハギレでイニシャルを縫い付けることを提案する「イニシャルのある部屋で」(花森安治)など、材料のないところから工夫する実用記事が掲載されている。

4月号の特集は「装い」で、「服飾の流れと方向」(西田千秋)、「新しいエチケツト」(GHQ経済科学局繊維部製品課長ドロシー・エドガース)、柳悦孝と濱徳太郎の対談「きものは含む空間美」、長谷川路可と島村フサノの対談「全体美で着る洋服」、「洋服の移り変わり」(八巻千秋)が掲載されている。このうち西田の文章は、東京の数寄屋橋あたりを歩きかう女性たちのよそ行きの服装について、「世紀の大敗戦」の一年後の人たちとは思えないほど「存外美しい」が、疎開しておいたものをそれぞれ着ているため、「色も柄もスタイルも種々さまざまである」と述べている。

4月号以外では衣服関連の本文記事は少なく、小さ

## 1950年前後の日本における都市中流女性の衣服製作・着用をめぐる状況

な囲み記事で、「スカウツは極端に言えば一年にウール地のものが一枚あればいい」とする「十月の服装計画」(谷長二)、「衣料はどうなる」(F記者)、「編物の新傾向」(高木とみ子)、「長くなるスカート」(ニューヨーク・タイムズ特約)などがあった。

衣服関係の広告は、西陣化学研究所製造の染料「みやび染」(洋装女性のイラスト入り)、大阪の美章園服装学校や東京高等技芸学校の洋裁通信教授、東芝電気アイロンが掲載されている。また、「婦人朝日」編、朝日新聞社発行の「夏のデザインブック」「秋から冬のデザインブック」の広告も掲載されている。このデザインブックは、「新型デザイン百六十余種発表、全部四色刷り」で、「海外の流行を巧みに採り入れた日本人向きスタイルブックの決定版」である。「洋装をする人々のために」「色彩の調和」などのタイトルで先述のドロシー・エドガースの談話も掲載している。

グラビアや本文記事だけでなく広告からも、海外情報に触れながら、材料はなく、各自が自分で洋裁技術を学び、手持ちの和服や洋服を染め直したり仕立替えたりする生活であったことがわかる。またGHQの幹部が日本人女性に対し、洋服についての助言をしていたことがわかった。なお「婦人朝日」は朝日新聞社傘下であるためか、同時期の他の女性誌にくらべて海外情報が多い。

## 2) 1948年

1月号は50ページ、2月以降は前年に引き続き40ページで、衣服に関する記事は少ない。

グラビアでは、「優美さをとりかえたアメリカの流行」(ニューヨーク・タイムズ特約)、「この夏の海水着」(ロンドン・ディリイ・エクスプレスニュースペーパーズ提供、絵と文・河野鷹思)などの海外情報と、ハギレを縫い合わせて小物やかばんを作る「お手玉のようなアクセサリ」(花森安治)が並列しているのは前年と同様である。

本文では「女流人形作家」の小林通による「和装の楽しみ」が、若い人にもっと着物を着ることをすすめて、「モンペ」については「いま急にすてるのも惜しい」として、通勤や労働の際に、調和を考えてモンペを着用することをすすめている。少し前になるがモンペについては「婦人民主新聞」1946年11月4日号にも「戦時中の流行服であったモンペも、この頃は買出しや闇屋の便利服みたいになり、美しい姿から縁の遠いものになりつつありますが(略)モンペを退蔵させることは再び実用品でない「キモノ」に逆行する不自然

な流行を追う恐れがあります(略)モンペは日本の衣服のなかで一番美しい外出着です」と述べられている。

そのほかの記事では「売られ売られた古着の流転記」(本誌・藤巴記者)が、古着の銘仙がどのように流通しているかを具体的に追っている。洋裁学校に取材した「ある日の洋裁学校」という記事もあるが、これについては後述する。

他には囲み記事で、ドロシー・エドガース記者会見による「アメリカ便り新語 ニュールックの流行」のほか、「家庭ごとに着物の一覧表」、「型をくずさぬ冬服の手入れ」、「明るい衣料の見通し」など実用記事がある。前年の「衣料はどうなる」に比べて状況が好転しつつあることがうかがえる。

広告では、前年と同じ「みやび染」、「ナショナル電気アイロン」のほか、「シャープ電気裁縫機」、「教育科学社高原社」の「女性教養全書」「裁縫の本」「家事の本」、「高級洋装 婦人装身具 ニューアメリカンスタイル」の東京・港区「ジャーゲン洋装店」が見られた。東京高等技芸学校は「公認学校の校外生募集」として「独学で正規の本校師範科卒業資格が得られる新制度あり。日本最初の独学女性出世の門」とうたっている。

## 3) 1949年

3月号から58ページに増やして装丁を新しくし、「読者批判」の募集を開始。5月号からは「私の作文」もはじまり、「婦人朝日」が特色を出し充実しはじめるのがこの年である。10月号からは84ページとなっている。

グラビアでは、「一流デザイナーによるパリ直送の今春のモード」(A.F.P.提供)、「私たちの生活にとり入れ易いアメリカのモード」(ニューヨーク・タイムズ特約)といった海外情報に加えて、10月号からは「一流デザイナー作品集」の連載がはじまる。これは「家庭で働くきもの」「初春の外着」など毎回テーマをもうけて8人のデザイナーのデザイン画を掲載するものである。デザイナーは高澤圭一、花森安治、中原淳一、桑沢洋子、伊東茂平、田中千代、杉野芳子、島村フサノで、連載の途中で伊東茂平が松井直樹に、花森安治が近藤百合子にかわった。この年、グラビアには更生に関するものがない。

記事では、後述する「洋裁界を眺む」や「今年の衣料はどうなるか」、「着がえの便利なベビー服」(大場真佐子)、「古い絹靴下から代用毛糸」といった実用記事、8月号～12月号には「ふだん著談義」と題する著名女性のふだん着に関するエッセーもある。また、Y・

H (花森安治か) による「服装時評」も不定期に掲載される。

広告は台東区の日本洋裁専門学院の生徒募集, 文京区のDSJ洋裁教室の通信教育, 生活研究社の「池田淑子著図解洋裁講座」, 「衣料更生の染料はとり染 婦人倶楽部特撰」, ナショナル, 三菱, シャープのアイロンとなっている。

雑誌のページ数が増えて衣服関連のグラビア・記事ともに充実し, 海外情報と更生利用だけではなく, 日本人デザイナーによる新しいデザインも続々登場するようになった。

#### 4) 1950年

1月号から更にページ数を増やし120ページとなる。

グラビアでは, 6月号まで「一流デザイナー作品集」が続き, 7月号からは「夏を楽しむ浜辺のきもの」(伊東衣服研究所伊東茂平 国方澄子)のように, テーマを決めて1~2人のデザイナーのデザイン画を掲載する形に変更している。また, 4月号からは「スタイル実験室」の連載がはじまる。これは, 俳優や画家などの著名女性をモデルにデザイナーが新しい服をデザインして実際に製作し, 着用の感想を寄せてもらうものである。モデルには10代から50代まで幅広い年齢層の女性選ばれている。「婦人朝日」の読者層の幅広さがうかがわれる。

記事では, 衣料品の統制撤廃を予告する1月号の「衣料品急いで買っては大損」, 「キモノの流行はだれがつくるか」, 「明朗な近代的感覚 田中千代さんの「キモノショー」」(木下了子), 「パリ・モードのできるまで」, 「分裂したパリ・モード王国 一流デザイナーとその作品」などがある。

広告では, はとり染, アイロンのほか, みづほ染料, 三菱ミシン, 「洋裁知らぬは女の恥!」とする東京・牛込の「日本洋裁教育会」の洋裁講義録, 「婦人服のご用命は! デザイナー杉浦和子」と掲げる日本橋三越の「ファッションルーム」がある。染料, 洋裁書, アイロン, ミシン, といった自家裁縫の必要品の広告だけでなく, 仕立の広告も登場した。百貨店で的高级婦人服仕立が, 従来の顧客だけでなく, 「婦人朝日」読者層にも拡大されつつあることがわかる。

グラビアから海外情報がなくなり, 本文記事でパリモードの内幕が読み物風に描かれる。占領後5年にしてアメリカンファッションへの関心は薄らぎつつあるようである。一方, グラビアは日本人デザイナーの活躍場所となり, 洋裁の技術だけでなく洋服のデザイン

も定着したことがうかがわれる。

#### 5) 1951年

10月号までは前年に引き続き120ページだが, 11月号からは140ページになる。

1月号の巻頭グラビアはカラーの「新進デザイナー三十人集」である。すでにおなじみのデザイナーたちが, 新人デザイナー30人を選び紹介している。グラビアのデザインは桑沢洋子が多くなり, 記事に作り方がつくようになる。内容も, 下着やレインコート, ウェディングドレス, 「我が家はデニム」など, ひろがりを見せている。また, アププリケやドロンワークなど手芸のページが登場する。「スタイル実験室」の連載は継続している。

記事では, 「純綿キキンは再現するか?」, 新繊維の性能を読者が試した「読者の実験報告ビニロン特集」, 「既製服店百貨店等からのぞいた街の女性風俗」, 「優しい手製のクリスマスプレゼント」などがある。桑沢洋子による特集記事「流行をどう着こなすか」では, 「あなたは流行色をどう着こなすか」「あなたは流行のスリーヴとカラアをどうとり入れるか」のように, ただ単に流行を追うのではなく, 常に「あなた」, すなわち一人一人の女性が, 流行を意識しつつも, どのようにして自分に似合う服, 動きやすい服を実現するか, という点に重点が置かれている。

広告では, 化学繊維の大広告がこの年の特筆すべき点である。4月号に「倉敷ビニロン」の大きな1ページ全面広告が載ったのを皮切りに, 旭化成のベンベルグ, 東洋レーヨンのアミラン, 大東紡績のシャインテックスなど, 裏表紙や全面を使った派手な広告が次々に出る。そのほかはカネボウ毛糸やオリオン毛糸, 東洋紡コスモ刺繍糸, グンゼ絹靴下などである。これまでに多かった染料や洋裁学校の広告は見られない。

#### 6) 1952年

1月号は190ページ, 2月号以降は約160ページである。ページ数は5年の間に約4倍になった。

グラビアは, 桑沢洋子のデザイン集が毎号掲載され, 記事に作り方もつく。「ふだん着になるスキー服」や「ウェディングドレスからハウスドレス 新婦の衣計画」といった, 贅沢なテーマがある一方で, 「アメリカの中古服から流行服誕生」, 「三反のゆかたで家庭着から外出着まで」のように更生利用も復活している。また, 「生かしたい昔のきもの美しさ」や「私のキモノ」など, これまであまり見られなかった和服関係のグラビアも登場している。

## 1950年前後の日本における都市中流女性の衣服製作・着用をめぐる状況

記事では、「婦人朝日服装相談室」と「全国仕事着デザイン・コンクール」がこの年の大きなイベントであるが、これらについては後述する。そのほか、「家庭で行う染色のはなし」、「これだけは知って置きたい化学繊維の知識」などがあつた。

広告は、これまでに引き続きグンゼ絹靴下、各社の化学繊維、ミシンのほか、3月号にはじめて富士の「電気洗濯機」が登場し、「主婦の生活を楽しくする」とうたっている。「最高級殿方御婦人用輸入洋服生地」の「エー・ポンピー商会」も登場。一例ずつであるが、染料と、「洋裁学校は出たけれど…どうもネ…ということでは困ります。花嫁免状ではなく、実力卒業証書がもらえるよい学校を選びましょう！」という東京の小川文子洋裁学院の小さな広告も見られた。

次に、当該期間中の「婦人朝日」に見られた、いくつかのテーマにそって記事をまとめ、考察する。

## (2) 洋裁学校

1948年6月号に「ある日の洋裁学校」(所武雄)という記事がある。大阪のある洋裁学校を取材したものである。「よく雨後の筍のようと言われる洋裁学校」は急造のバラックが多いが、ここは元軍人が、戦前に建てた洋風邸宅を利用して洋裁学校を開いたものだという。取材した生徒たちのプロフィールが紹介されているが、年齢層も階層も考え方もまちまちである。所は「洋裁学校に来ている人の十分比は、五人までが真面目に洋裁を習おうとする娘さん、残り五人のうち三人が奥さんや未亡人、これも真面目なひとです。あとの二人が遊びなのではないでしょうか」とまとめる。

その後一年半を経過した1949年1月号には、「洋裁界を眺む その現状・その小歴史・その系統」として座談会「洋裁界の眺め たてからよこから」、「洋装の小歴史」、「洋裁界分布図—源平二派に五撰家など」の三本立て記事がある。座談会は「文化服装学院 宇田川精一、菅谷洋裁専門学院 菅谷文子、東京女子高等師範 成田順子、ドレスメーカー女学院 宮崎直江、花森安治、松井直樹」によるもので、編集部の「一時、洋裁学校が「雨後のタケノコの如く」できたという表現がありました、一体全国で何校くらいあるのでしょうか」との問いかけに、菅谷が「認可のあるのは、東京だけで一三六校。認可のないのはずいぶんでしょう」と答えている。生徒の目的は「自分の身なりを整えるためというのが三分の一、万が一のとき収入を得られるようにというのが三分の二」、以前は職業目的は少なかったと宮崎は述べている。また、花森・松井を中

心に洋裁学校での技術偏重の教育が批判され、簡単な裁断方法が必要などの提言もされている。

1950年3月号には「彼女らの東京遊学 ルポルタージュ」という記事があり、地方から東京へ出てきて学ぶ女子学生たちを取材している。女子大学や共学大学に並んで洋裁学校も登場する。目黒のドレスメーカー女学院でのインタビューで記者は、更生品が多いこと、洋裁学校生の忙しいことに驚いている。「もし新しい生地ばかりで作るとすれば、四千人の生徒の九割は退学しなければならないわよ」という生徒の言葉が紹介され、「父親の古洋服、タンスの底からひっぱり出されたお召、虫干に見つけた二重廻し、そんなものがここに持込まれると、トタンに裂かれ、染められ、つがれ、切られ、かがられ、まつられて颯そうと校門を出てゆく」と形容される。授業は隔日だが徹夜することもあり、一年に十二着を作るという。生徒の多くが卒業後は郷里や東京で洋裁店の経営を考えているようである。文化とドレメの比較などのあと、「しかし洋裁学校生が共通していることは、「洋裁、洋裁といって馬鹿にするがこんな実際の、真面目な、忙しい学校ってないわね」ということであつた」と書かれている。洋裁学校に向ける世間の目、それにもかかわらず、苦勞して教材の生地を調達しながら洋裁店経営の夢をもつ、いきいきとした女性たちの姿が描かれている。

ところが早くも1950年9月号「日本の女性 はやりものすたりもの 華やかなものから地道なものへ」では、「下火の洋裁熱」として、「ダンスについて、戦後猛烈をきわめたのは、若い娘さんたちの洋裁熱(略)最近はこれもどうやら下火」、「水戸市内の某洋裁学校(略)今年も定員を維持するのでせいっぱい。いままでも農村の娘さんが七割近くを占めていたが、現在では市街地の娘さんと五分五分になっている」、「卒業生は四分の一ぐらいが、その道の就職希望だが(略)一ヵ年修業では売れ口が少なく、今年もせいぜい二人か三人(略)それも出来高払いで、夜おそくまで働いて月四千元がやっとだとのことで、洋裁熱はますます低下しつつある」とされている。

一般には、1950年代が洋裁学校の最盛期とされている(奥村1979, 44)。1948年から1950年の記事を読み合わせると、短い間に、とにかく自分や家族の洋服を縫うために様々な年齢層、階層の女性が近くの小さな洋裁学校に詰めかけていた時期から、中等教育を終えた一定年齢の女性たちが都市部の大手の洋裁学校を目指す時期に変わっていったことがわかる。「下火」

というのはおそらく、前者のようなタイプの洋裁学校に当てはまり、都市部の大手の洋裁学校は、1950年代に最盛期を迎え、以後、一時的なブームではなく日本社会に定着していったのだと考えられる。

広告においても、1947年～1949年の洋裁学校の広告は淡々としているが、1950年には「洋裁知らぬは女の恥！」、1952年には「洋裁学校は出たけれど…どうもネ…ということでは困ります」というキャッチコピーが見られる。洋裁教育の定着と深化がうかがわれる。

### (3) 全国巡回婦人朝日服装相談室

「婦人朝日」は1952年1月～10月に全国各地で「婦人朝日服装相談室」を開催した。担当は「本誌洋裁顧問」の桑沢洋子である。桑沢は、戦前より「婦人画報」を中心に編集やデザイン活動をおこない、敗戦後は「婦人民主クラブ」の会員となり、各誌で服装デザインや服装相談を担当していた（常見2001, 129）。「婦人朝日」1月号の「おしらせ」には、「流行は、たしかに、わたくしたちの衣生活にとって大きな魅力です。が、パリやニューヨークの流行にとびつくまえに、わたくしたちの衣生活のうえで解決しなければならない切実な問題がたくさんありはしないでしょうか」とある。相談方法は、「A デザイン、B 洋裁技術、C 服装計画、D 洋裁家の生活技術」のいずれかに関する相談内容を読者が四百字詰め原稿用紙一枚に書いて「婦人朝日」あてに送り、そのうち「最も共通の問題とおもわれるもの」30が選ばれ、会場で桑沢が答えるというものである。さらにそのなかからいくつか選ばれ、誌上で紹介された。服装相談室の報告記事は同年3月号から12月号に掲載されている。巡回先は、東京、大阪、小倉・博多、名古屋、松山、仙台・高崎、函館・札幌、金沢、静岡、新潟であった。記事に添えられた写真には満員の会場や、身を乗り出して質問に答える桑沢の姿が見られる。相談者は10代から50代、洋裁家から主婦・学生、洋服ばかりで暮らしている人から和装を洋装に切り替えようとする人まで、多岐にわたる。

相談内容は、体型に合わせたデザイン、似合う色の選び方、化繊の扱い方、服装計画、仕事着の工夫などであるが、桑沢のアドバイスは、単に洋裁技術や流行を教えるだけでなく、まず、その人にどう合わせるか、どうすれば一人一人にふさわしい洋装を確立できるかに力点が置かれている。その人にとって、着やすいか動きやすいか、土地の気候や風土に合っているか、手

持ちの洋服や和服を有効に使うことができるか、が常に考慮されているのである。

9月号に掲載された相談者の感想には、「貴方にある色とスタイルはと次々に話して下さるのを伺いながら、私は今までと全く違う新しい自分が、忙しそうに働いている姿を天然色フィルムのようにくるくると思い浮かべていた。それはついぞ考えたことのない客観視した自分の姿であった」とある。また8月号には「集まった人々の真面目な様子、つつまじやかな服装（略）良い衣生活とは一部の特別な人々の贅沢にあるのではない。こうした、つつましい生活に芽生えて初めてすすく育つことを思われ、各地にこの催を持たれた先生方に何と感謝いたしてよいか解りません」とある。

なかで異色なのが、4月号に掲載された大阪の「今後の洋裁学校の行き方」である。相談者は大阪で洋裁を教えているが、生徒は「働く婦人達（夜間）が大部分を占め、地域も北大阪の一隅で知的水準は低い方であるため、難解な製図を避けて経験による改良を加えて平面式を教え」、「経済的にも、いろいろと制約される環境にある生徒なので、私は努めてその人達と生活を共にする心がけで誠実を第一として続けて来」たが、「昨秋ショーをしたグループの人達と共に研究する高度の服装芸術なるものが、前記のような環境にある私の生活にどれだけのプラスになるか？また現在の日本の社会情勢の中の生活芸術としての服飾がどのような方向を行ってよいか？（略）等々考えて、私は矛盾を感じ、今後洋裁家としての自分のあり方について、ぜひ桑沢先生にご意見を伺い、指導を仰ぎたく筆をとった」という。つまり、生活に追われるなかで洋裁を習いに来ている人々と、華やかなファッションショーをしている人々との格差に矛盾を感じ、洋裁のありかたはこれでよいのかと疑問をもったのである。桑沢はこれに対し、「今後の洋裁教育は、一般の家庭裁縫の教育と専門教育にはっきり別けて考えなければならないと思」う、「日本の生活と結びつけた基本的な計画や形を、あなたが親切に生徒に教えてゆく、しかも、いつも新鮮な時代の空気をあなたが一歩さきに吸って、実践してゆきながら、その高い近代生活の方向と感覚を教育の中に、あなたが媒介者となって噛みくだいてわかりやすく説明してゆくことだ」、「ほんとうのきものの『美しさ』『あたらしさ』は、形のうえだけの見世物式のものや、曲がったりくねったりしたものではなくて、生活的に理屈にあったものでなければなら

## 1950年前後の日本における都市中流女性の衣服製作・着用をめぐる状況

い、「意を強くして、あなたも同僚も生徒も一緒になってゆく勉強会や呼びかけをしてゆかなければなりません」等と、かなりくわしく回答している。

日本の洋裁文化は敗戦後、厳しい衣料事情のなかで生活に密着した技術の習得やデザインを練り広げてきたが、敗戦から6年を経過したこの時期に一つの曲がり角を迎えていたと考えられる。指導的立場にある洋裁家のなかには、日々の着る物にも欠く状態を脱し、「デザイナー」としてパリモード追随型の華やかなファッションを練り広げる人たちもいた。しかし、都市中流、そして下層の女性のなかにはまだ、生活に追われながら実用的な洋裁技術を身につけようとする人々がいた。両者の不連続をなんとか調整しようとしたのがこのころの桑沢の立場であり、次の「全国仕事着デザイン・コンクール」のような例であると考えられる。

## (4) 全国仕事着デザイン・コンクール

1952年の「婦人朝日」のもうひとつの大きなイベントは「全国仕事着デザイン・コンクール」である。2月号に募集記事を出し、6月号には「第一次入選作品集」として応募作品1,793点から選ばれた60点のデザイン画と簡単な説明を掲載、そして7月号には、「機能美を生かした新しい仕事着“全国仕事着デザイン・コンクール”入選作品と審査会風景」と題して、第一次で選ばれた60点の、実物制作、モデル着用による公開審査の報告がある。会場は文化服装学院大講堂、入場者は約2,000名、審査員は伊東茂平、杉野芳子、野口益栄、桑沢洋子、山本松代である。記事には、すし詰め会場や後列の座席で椅子の上に立って審査風景を見る人々の写真がある。また、「地方の無名の人の作品であるにもかかわらず、色彩や形の調和が、実にうまいと思いました。とくに『職場の仕事着』『農村の仕事着』は、実際から離れず、しかも若々しい飛躍があって、画家の目にも興味がありました」という画家某氏の感想や、「布地の性質を知って、うまく使ってあるのには感心しました。洋裁熱が一般化するとともに、レベルが全国的に高まっていることが、はっきり判ってうれしかった」という化繊協会の箕浦新吾氏の感想が添えられている。

コンクールは「一般家庭の仕事着」「職場の仕事着」「農山漁村の仕事着」の三部立てで、それぞれに特賞、一等、二等、三等が選ばれた。「職場の仕事着」の職場には工場、ウエイトレス、車内販売、オフィスなどが含まれる。家庭内の家事から、第一次・第二次・第三次産業まですべてを含めて「仕事着」というくくり

にしているのは、女性の職場進出や女性労働に注目し、なおその「仕事」の範囲が家事までを含めて幅広いという当時の考え方を反映していると考えられる。

入賞者の肩書きは、「洋裁学生」、「洋裁教師」、「主婦」、「商店デザイナー」、「百貨店デザイナー助手」などで、住所は東京、松戸、函館、大分などである。いわゆるプロもアマチュアも応募している。この時期の洋裁と、そして女性の仕事への関心の高さがうかがわれるが、「農山漁村の仕事着」であっても、応募者は、都市在住か、都市で洋裁教育を受け、その後、「農山漁村」に里帰りまたは移住した女性であることから、やはりこの時期、洋裁技術の習得や洋裁への関心が大都市や地方都市中心のものであったことを確認できる。

入賞者の感想には「昭和六年デザイナーを夢見てドレスメーカー女学院に入学。(略)戦争未亡人となり六年前台北から引き揚げ幼い三人の子供と老母をかかえ、ひたすらデザイナーとして生活が出来るようになる日を念願し(略)今までにコンクールはあってもいざいざ高価な布地を競い、およそ貧しいデザイナーには手の出しようもなく、婦人朝日のこの度のコンクールは私のような境遇にある者には全くめぐまれた条件ぞろいで(略)これを機にますます勇気と希望をもってデザイナー修業の道を歩みつづけて行きたい」、「仕事着のコンクールの社告をみた時、周囲を農村に取りまかれているわたしには、農村の生活がありありと頭に浮かんでまいりました。東京で洋裁を学んでいたころ四季のファッション・ショーをよくみに行ったものでしたが私の住む農村の人から考えると、それはまるで夢のようなものばかりでした。だれもが生活をしている以上、それぞれの仕事に応じた能率的で楽に着られる服装をしたいという気持ちは同じです。そのことから今度の(略)コンクールはわたしにとって、このうえもない喜びでした」とある。

入選作品の写真を現代の私が見ると、ウエストを絞って肩や胸が丸い、当時流行のディオール風でありながら、ゆったりした袖ぐりやズボンなど、見るからに着やすそうで軽快なデザインである。とくに工場着や農山漁村の仕事着にみられる「つなぎ」は、現代にも通じる新奇性がある。参考に掲載された審査員の作品のほうに、機能性や新奇性に劣るように見受けられる。

後に入選作品は「仕事着のデザイン集」という本にまとめられて朝日新聞社から出版され、好評を博した。また1952年8月号によると、第三部「農山漁村の仕事着」の入選作品は農林省の生活改善普及員の講習会

で取り上げられるなど反響があった(常見 2001, 130)。

このコンクールは、敗戦後の女性たちが、洋裁学校の普及によって洋裁技術を獲得し、自ら働くことを前提とした「仕事着」という分野で、外国の流行を適度に取り入れながら、独自の創造活動をおこなっていたことの、ひとつの証明であると言えよう。

#### (5) 読者の生活

1949年の3月号に「今年の衣料はどうなるか」という座談会が掲載されている。「政府は悪くなるという業者は良くなるといっている」という見出しのもと、「商工省 藤井淳、主婦連合会 川崎澄江、高島屋 田村嘉二、伊勢丹 大竹幸作、放送局秘書課 吉田久乃、本社政経部 小坂徳三郎」による座談会の収録である。「国内で生産出来る最大限度を輸出に振向けて、最大限度を民間の衣料にする」という政策のため、配給が足りない、ヤミ物資をどうするのか、という問題について、消費者代表の2人(川崎と吉田)が、政府と業者に詰め寄る形となっている。

実用記事やグラビアにおいても、1949年までは更生が多い。派手な柄のひざ掛けをジャケットに転用するなど、材料不足は深刻である。洋裁学校における更生の様子も先述のとおりである。

ただし、衣料品の統制が完全に撤廃され、合成繊維の華々しい広告が誌面に登場する1951年以降になると、更生記事も「アメリカの中古服から流行服誕生」、「三反のゆかたで家庭着から外出着まで」のように、既製品や新しい生地を買った場合とどちらが経済的かくらべたり、和服の柄を楽しんだりというように、更生を楽しむような調子に変わってきている。

1951年7月号の「丸ビル女性五つの断面」という特集記事では、首都の中心である丸ビルのオフィスで働く女性でさえ、「オーヴァ」を「持っていない」5%、「一着」58%、「二着」25%、「三着」5%、「オーヴァ」を「自分の給料でつくる」56%、「親に一部補助してもらおう」26%、「全額親に出してもらおう」6%、「ブラウス」を「持っていない」3%、「一着」2%、「二着」5%、「三着」14%、「四着」18%、「五着」43%、「ブラウス」を「自分で縫います」48%、「店で買います」7%、「縫うこともあるし買うこともある」45%という状況が紹介されている。

一方、「婦人朝日」読者の生活がうかがえる記事に、1952年11月号の「私の作文、の記」がある。投稿欄「私の作文」の入選者を紹介したものである。入選3回、「会社員妻二九歳」のIさんは、毎月欠かさず

投稿しているが、「これまでは家計不如意であり婦人朝日は買えなかったんです」、原稿料は女の子2人の「お嫁入り」の費用に当てる予定、と述べる。写真では、「サザエさん」ふうパーマをかけた女性が、擦り切れた畳の上に小さな座卓を置き、子どもの宿題を見ている。服装は白いブラウスに色物のカーディガンをはおっている。特別募集で最高点を獲得した「会社員妻四一歳」のMさんは、二階家の隅の四畳半を間借りして親子4人で暮らしている。「戦災以来、家を求めて七年、都営住宅の落選九回」とのことである。「原稿料は、ボロつぎをしている間に、どこもなく消えてしまった」、「生活費に追われて、婦人朝日を買うのは時たま、大ていは立読みですます」とある。写真はブラウスにスカート、カーディガンで、「ボロつぎ」をしている様子である。そのほか、「農家主婦三〇歳」の囲炉裏端での緋の着物にモンペ姿、一族みな軍人だったという「未亡人六六歳」の質素な部屋で書き物机に向かう羽織姿などが掲載されている。雑誌に作文を投稿する人たちであるから、ある程度の知識層であろうが、敗戦後7年を経て、なお一般の暮らしぶりは厳しかったことがわかる。

デザイナーの作品を紹介するグラビアは華やかであるが、本文記事には、日々の生活に直結する経済や労働の問題を扱うものも多い。上記のように、この時期、都市中流女性の生活はなお厳しく、「服装相談室」や「仕事着コンクール」といった企画の盛況も、華やかなファッションと現実生活との懸隔を埋めようとするものであったことによると考えられる。

#### 4. 結 論

以上により、1950年前後の日本における都市中流女性の衣服製作・着用をめぐる状況として、次の点が明らかになった。

第3章の(1)でおこなった、1947年～1952年の「婦人朝日」の衣服関連記事全般の概観からは、第一に、デザイン面では、1950年ころから日本人デザイナーの活動が活発になり、海外情報はアメリカ中心からフランス中心に変わり、一方で和服の良さを再認識する傾向が見られること、第二に、材料面では、1951年以降、化学繊維の出回りとともに生地や用具が豊富になり更生衣料と併行していくことが明らかになった。

第3章の(2)でおこなった洋裁学校関連の記事の考察からは、年齢・階層を問わない洋裁の爆発的なブームは1950年ころに一段落し、以後は一定年齢の女性

## 1950年前後の日本における都市中流女性の衣服製作・着用をめぐる状況

が通う都市部の大手洋裁学校が定着していったことがわかった。

第3章の(3)でおこなった「全国巡回婦人朝日服装相談室」と第3章の(4)でおこなった「全国仕事着デザイン・コンクール」の記事の考察からは、敗戦後の労働量の多い生活を背景にした和服から洋服への移行のなかで、一人一人の生活にどのようにして洋装を合わせるかが重視され、家庭内や家庭外での労働に応じた動きやすさ動きやすさが求められたことが明らかになった。

最後に、第3章の(5)でおこなった読者の生活に関する記事の考察からは、敗戦後7年を経てなお厳しい都市中流女性の生活がわかり、グラビアに見られるデザイナーたちの華やかなファッションとの懸隔が明らかになった。(2)(3)(4)で取り上げた記事は、両者の溝を埋めようとする努力の結果であると考えられる。

他の女性誌を参照すると、1949年秋ごろから洋裁関係の記事が急増する。「主婦之友」1948年8月号で戦後はじめて復活した実物大型紙つきの付録も、このころどんどん盛んになっている。「婦人朝日」では、「一流デザイナー作品集」のはじまったのが、1949年8月号である。

同時期に和服の良さを再認識しようとする傾向が見られることも各誌に共通しており、「婦人倶楽部」では1949年12月号にはじめて、洋裁ではなく和裁の特別付録をつけている。ただしこの時期の和服への関心は、昔どおりの伝統を守るのではなく、洋服との折衷をこころみながら、当時の生活に適應するように改良を加えようとするものであった。

これらのことから敗戦後の衣生活における豊かさへの変化は、少なくとも女性誌のなかでは、衣料品統制の完全撤廃にさきがけて、1949年の秋からはじまっていたと考えることができる。

私がおこなったインタビューにおいても、1950年までに裁縫女学校や専門学校などで裁縫を学んだ方からは、実習で使う生地がなく、家族や親戚から古着を集めるなどたいへん苦労したことを聞いた(長弘と森2003, 39; 森2006, 64)。そのようななかで更生の楽しみを知り、今もリフォームの衣服作りを楽しんでおられる方もあった(森2006, 68)。また、敗戦をはさんで通学した裁縫女学校では裁縫の基礎を学んだがデザインは教えられず、その後1950年代に入学した洋裁学校では、基礎よりもデザインが中心であったとの

証言も得ている(森2006, 62-64)。

女性ばかりの編集委員をもって「婦人解放」を目的に掲げ、1946年8月に創刊した「婦人民主新聞」第2号には、「女性解放いま一歩」「戦災孤児にローマ字教育を実験」「牛乳の適配、暫くの辛抱」「母子保護法の反響」などの記事と並んで、画家の藤川栄子による「個性を生かす服飾美」というコラムがある。「街を歩く女性の姿は誰彼の区別がつかないほど同じ髪形で同じ人のように一様に見えるほど服装に独自の個性がない」とした上で、「活動的で合理的な洋服が、和服に比べて生活的であることはいふまでもないことであるが、和服でもなく洋服でもない活動的で美化された、日本女性の美が強調された新しい衣服が創造されなければならない」と提案している。このころの同紙には、「婦人朝日」の広告と並んで洋裁書の広告が多く、後に「美しい暮らしの手帖」で活躍する花森安治の着こなしや裁断の提案も掲載している。

敗戦後、生活物資が不足するなかで、家庭内外での多くの労働をおこないながらも女性たちは、「服飾美」への関心を抱き続けていた。一方で当時は、日本国憲法の制定にともなう、男女平等への意識や労働者の権利への意識の高まりがあり、「婦人朝日」や「婦人民主新聞」のような女性の労働や女性の主体性を重視する立場のメディアでは、女性の衣服に活動性を求め、家庭着であっても「仕事着」の側面を重視した。その結果として、モンペや洋服の活動性、そして和服の良さや洋服の魅力を取り入れて総合した新しい衣服の創造が提案されたのである。「全国仕事着デザイン・コンクール」で見られたのは、そのようなデザインであった。

あわせて、このような敗戦後の衣服文化を支えていたのが、ひとりひとりの女性たちの洋裁技術と洋裁デザイン習得への意欲であったことを、「婦人朝日」を中心とする当時の資料から明らかにすることができた。

1950年前後の日本における都市中流女性の衣服製作・着用をめぐる状況は、女性たちの洋裁文化習得に対する主体的な意欲と、外国のモードへの関心・和服の再認識と、働きやすさ・暮らしやすさへの希求によって決定されていたとすることができよう。

## 引用・参考文献

- 朝岡康二(2003)古着と既製服一駅前広場・三角地など、『衣と風俗の一〇〇年』,ドメス出版,東京,271-296  
井上雅人(2001)『洋服と日本人』,廣済堂出版,東京

- 井上雅人(2003) 総動員体制下の衣服政策と風俗、『衣と風俗の一〇〇年』, ドメス出版, 東京, 55-89
- 森 理恵(2006) 被服教育と洋裁文化の体験、『洋裁文化形成に関わった人々とその足跡—インタビュー集その1—』, 武庫川女子大学関西文化研究センター, 西宮, 41-70
- 長弘真弓, 森 理恵(2003) 京都府立女子専門学校における裁縫教育の意義, 京都府立大学学術報告人間環境学・農学, **55**, 35-48
- 奥村萬亀子(1979) 服作りと衣生活—婦人服を中心に—, 京都府立大学生生活文化センター年報, **3**, 33-58 (同(1998)『京に服飾を読む』, 染織と生活社, 京都, 331-362に再録)
- 常見美紀子(2001) 桑沢洋子による「仕事着」デザイン, 現代風俗, **23**, 128-141
- 渡辺明日香(2005)『ストリートファッションの時代』, 明現社, 東京
- 柳 洋子(1992)『衣生活社会史』, ぎょうせい, 東京
- 横川公子(2003) 人絹とミシン, 『衣と風俗の一〇〇年』, ドメス出版, 東京, 22-54
- 横田尚美(1999) 戦中ファッション再考, ファッション環境, **9**(2), 54-59
- 与那覇恵子, 平野晶子(監修)(2002~2006)『戦前期四大婦人雑誌目次集成』, ゆまに書房, 東京